

(8) 令和2年度「課題研究」の実施に向けた研究

(1) 研究の背景

平成26年度から平成30年度まで、文部科学省より第一期スーパーグローバルハイスクール事業(SGH)の指定を受け、世界を舞台に活躍できる創造的で活力のある生徒の育成を目指し、アクティブラーニング授業の研究実践に取り組んできた。5年間の取組を経て、生徒を対象とした意識調査からは、主体性や積極性においてポジティブな変化が見られ、学校内外での研修や発表、各種の課題研究コンテストなどへ挑戦する生徒の数も増えてきた。その中で、新たな教育課程でスタートした今年度から、「地域との協働による高等学校教育改革推進事業(グローバル型)」に指定をされた。これを機に、本校では「課題研究」を核として、生徒自らが課題を発見し解決する力を育成し、次代の地域社会を支えるリーダーに必要な資質を備えた人材育成のため、カリキュラム研究・開発を行った。高校生を取り巻く社会背景を踏まえるとともに、本校生徒の現状を把握し、検証のポイントを明らかにすることから始めた。

〈検証ポイント〉

- ・これまでのSGHにおける取り組みを通じて、人前で話す機会が与えられるとある程度適切に話すことができるようになりつつある。しかしながら、それが、深い課題意識をもったものや、本当に生徒自身が追究したいことに基づいたものであったものか、とえば、その段階に至っているとは言えない。
- ・教員が与えたものに対しては、真面目に取り組む生徒が多いが、自ら課題を見つけて、どのようにすれば良いかについて、考えて自ら動ける生徒が少ない。自分を客観的に観察し、課題意識をもち、自らの進路を切り開いていける生徒を育成するにはどうすればよいか、検証・検討が必要である。
- ・仲間と協働し、物事を進める力がある程度身に付けてきた。また、他者の考えを尊重する心ももっているが、実際にそれを発揮することに課題がある。自らの資質、能力、体験や知識を生かし、新たな体験や知識と関連づけ、適切に発揮する姿勢を育成するにはどうすればよいか、検証が必要である。
- ・課題に取り組む姿勢は熱心だが、すぐに答えを求めそれに飛びつこうとする。安易な目先の答えを求めるのではなく、答えの出ない問いにじっくりと取り組む姿勢を育成する必要がある。

(2) 次年度「課題研究」に向けて ～平成31年度入学生に対して

(1)で挙げた検証事項を踏まえ、まずは第1学年生徒に関わる教員の中で、「課題研究」に関する考え方を、共有するところから始めた。教育課程上における「課題研究」は、2年次2単位、3年次1単位で実施するが、1年次における生徒への動機付けが、「課題研究」を邁進させる原動力になると考え、今年度入学生に対して、様々な働きかけをしてきた。

そのために、教員の共通認識は欠かせないものであった。教科・科目の指導とは異なり、教員は生徒の探究活動の支援に徹底するという幾度も確認し、教員は生徒が探ろうとすることについての、答えをもっている必要はなく、確認を促したり、説明を促したり、展望を確認したりするような、いわゆる「サポート」「ファシリテーター」役であるということを、議論を重ねながら共通認識をはかってきた。当初は認識に大きなずれがあることは否めなかったが、少しずつそれが改善され、生徒に共通のメッセージを伝える体制が整いつつある。このように、まずは教員集団の共通認識を高められる機会を定期的にもってきた。以下、今年度の「課題研究」に関わる実施内容及び、そのねらいについて記す。なお、表中に①のように番号を付したものについて、説明を記す。

	月日	生徒の主な動き	教員の主な動き
①	4月末	「気づきノート」作成	ガイダンス
			新聞記事等紹介
②	6月12日	講演会（1）	
			学年打ち合わせ（1）
③	夏休み	「課題研究」へのアプローチ	
	9月2日	上記課題の提出	④内容確認、フィードバック
	9月中	④ブラッシュアップ	
	9月末		学年打ち合わせ（2）
⑤	10月23日	クラス内交流会	
⑥	10月24日	講演会（2）	
⑦	10月25日	講演会（3）	職員研修（1）
	10月末	⑧振り返り	
	11月初旬		学年打ち合わせ（3）
⑨	11月13日	LHR（1）	
⑩	11月20日	LHR（2）	
			教科主任者会
⑪	11月27日	テーマ調査用紙提出	
			学年打ち合わせ（4）
	12月18日	『課題研究メソッド』第1章を読む	「グランドデザイン」共有
	1月30日		学年打ち合わせ（5）
⑫	2月5日	LHR（3）	
	2月7日		職員研修（2）
⑬	2月15日	第2学年「課題研究発表会」に参加及び振り返り	
	3月中旬	『課題研究メソッド』第2章を読む	

①「気づきノート」

生徒全員に「気づきノート」を作らせた。日常のふとした気づき、時間をかけ理解が深まったうえでの気づき、さらに出てきた疑問等を記入させ、自分の思考の過程を記録させる目的で始めた。サイズや体裁は生徒にまかせ、まずは10連休中に新聞記事を1つ選んで、選んだ理由（3文以上）とキーワードの意味を調べさせた。また日々の気づきをメモする習慣をつけさせ、生徒が日々の生活を振り返る機会とさせた。このノートは次年度より「研究ノート」として使用させ、メモと記録との違いを正しく理解させながら、使用させていく。

②講演会（1）

朝日新聞社様より江原健大氏をお招きし、『日常における気づきの大切さ』と題し、講演会を実施した。氏からは新聞記事の構成を紹介頂くとともに、読み方、情報の扱い方等についてお話頂いた。新聞を購読していない家庭も増える中、どのように生徒たちに、ウェブサイト上の情報だけに依存するところから脱却させるかについて、教員も考えるきっかけとなった。

③「課題研究へのアプローチ」

夏休みの課題として、第1学年生徒全員に「課題研究へのアプローチ」に取り組ませた。次年度の実践に向けて、準備段階の一つとして（1）テーマの設定（2）テーマ設定の理由（3）どのようにテーマに迫ったか及びその理由（4）分かったこと、分からなかったこと及びさらに迫ってみたいと思ったこと（5）参考文献をB4 1枚のレポートにまとめさせた。生徒には「課題研究」の意義、生徒に身につけて欲しい力を説明した上で、日々の気づきや、新聞記事、また夏季休業中に出される各教科・科目からの課題と結び付け、課題を設定させるようにした。この時点では、生徒はメソッドの全て（先行研究を調査する等）を知らない状態であり、各自がどのようにアプローチをするのか、またそのような手段をとった理由はなぜかを確認させた。また迫った結果、自分にとって好ましい結果も、好ましくない結果も全て記録させるようにした。これに先立ち、第1学年の教員からテーマ例をヒントとして、複数挙げてもらい、生徒の好奇心を刺激する機会とした。

④「課題研究へのアプローチ」へのフィードバック

第1学年担任・副担任で、取り組み確認をした。付箋を用いて、主に以下の点に絞ってフィードバックをした。

- （1）事実と意見を分けてかけているか
- （2）出典を明らかにできているか
- （3）無理に結論づけたりしていないか

生徒は教員からのフィードバックをもとに、各自ブラッシュアップをし、クラス内交流会に向けて準備を進めた。ブラッシュアップでは、レポートの体裁を整えることを目的とせず、指摘を受けた点について、余白や裏面に補足事項を記入するようにさせ、生徒自身が自分の過程を「可視化」できるようにさせた。

⑤「課題研究へのアプローチ」クラス内交流会

各クラス6名～7名程度のグループを作り、一人あたり3分間で発表を行った。生徒にとっては、初めての経験であったが、グループによっては質疑応答も活発にできていた。⑧において、③～⑤までの振り返りをさせたが、自分の取り組みを俯瞰する習慣は、本校「課題研究」のテーマにつながるものであり、今後も適切なタイミングで実施していく。

⑥⑦講演会（2）・（3）

⑥では、本校学校設定科目である「グローバル国語」の授業の一環として、劇作家である平田オリザ氏をお招きし『コミュニケーションの第一歩』と題し、コミュニケーションをとる意義について、またその中でどのようにして人は人格を形成していくのかについて、お話を頂いた。また⑦では、岡本尚也氏より『課題研究で身につけたい力』についてご講演頂き、生徒たちは、「課題研究」において実践することと、その意義について学んだ。岡本氏には、その後職員研修も実施して頂き、学校全体で「課題研究」について共通認識していく機会とした。

⑨～⑪「課題研究ガイダンス」及び「テーマ調査」に関わる LHR

生徒たちに次年度「課題研究」実践に向けて意識をさせる時間を設けた。第1学年担任を中心に、各クラス LHR の時間を利用し、「テーマ設定に向けて」及び「課題研究ガイダンス」を行った。各時間ともに、共通の資料を用いて実施することで、学年全体に同じ情報を行き渡ることを徹底し、約1か月の間、生徒はどのような分野で、どのようなことに迫っていきたいのかを、考えさせた。その際、留意させたのは以下の点である。

- (1) 2年次における類型（文型、理型）選択に関わらず、幅広い分野から、自分の興味・関心を探ってみること。
- (2) 「課題研究」のために選ぶのではなく、一つの物事への迫り方（切り口）は、複数あり、多角的なものを見方を意識するきっかけにすること。
- (3) テーマ選択をした時点から、全て「自分事」とすること。
- (4) 日頃の授業で学んでいることを、発展させたり深化させたりしてみることに。

これらの指導を経て、11月末に「テーマ調査用紙」を提出させた。この時点で記入したものが次年度「課題研究」のテーマとして決定ではないが、クラス編成と並行しながら、少人数講座を編成していく際の参考資料としている。

⑫次年度「課題研究」に向けたLHR

「課題研究」に関わる「これまでとこれから」と題し、LHRを実施した。生徒たちに、場当たりに取り組ませるのではなく、それぞれの取組が連続的な意味をもたせることができるようにさせた。また①でも触れたが、次年度に向けた具体的準備として「気づきノート」を「研究ノート」にステップアップしていく意義等についても確認した。

⑬「課題研究発表会」に参加

第2学年による「課題研究発表会」に聴衆として参加した。事前指導として、発表内容を鵜呑みにするのではなく、「本当にそう言えるのか」「なぜそのように考えられるのか」を意識して聞くことを強調した。終了後、参加して学んだことをアンケート（振り返り）用紙に記入させた。発表内容に興味をもった生徒は多かったが、それ以上に「課題研究」には、当事者意識をもって取り組む意味に、気づくことのできた生徒が多く、この1年間の学年の取組が、生徒に浸透してきたと言える内容のものが多かった。

<全体を通じて>

全ての取り組みにおいて、今年度第1学年に関わる教員の打ち合わせは、欠かせないものであった。表中に示した教員打ち合わせの他、成績等に関わる定期的な学年会議においても、「課題研究」について生徒に十分にその意義を伝えていけるように、打ち合わせの時間をもつようにした。また全体の教員研修の機会（表中「職員研修（1）（2）」）をもち、担当分掌だけでなく、学校全体で課題意識を持って頂けるようにしている。今後も継続し、スケジュールとその意義の確認、また評価について、全職員で共有をし、生徒の探究活動をサポートできる体制を整えていく。

(3) グランドデザインの策定・共有

本校における課題研究の目標について教員全体で共有するため、グランドデザインを策定した。本校の教育目標に基づき、課題研究を通じて育成したい生徒像を共有するとともに、教員の役割について共有することとした。本校における課題研究の特色は、個人研究を基本とし、生徒の主体的で適切な課題設定及び、設定した課題に向かう過程を充実させることにある。その中で、キーワードとなった言葉が、「俯瞰力」である。いわゆる「鳥の目」となり、生徒自身が考えていることや、しようとしていること、自分の立ち位置を少し客観的に見たり、広い視野で見たりできる生徒の育成することを目指すこととする。このことが、当事者意識をもった課題研究への取組を強くするものと考えている。

これらを達成するにあたり、資質・能力をベースとした12項目の目標を設定した。各時期、各段階で、生徒と教員が何を目指し学んでいくかを表したものであるが、いずれも切り離せないものではあり、それぞれが互いに作用しながら、培われていく力であるため、柔軟な評価が必要である。そのために、それぞれの段階および身につけたい能力ごとのルーブリックの策定に向けて、研究を継続する。

学校教育の重点目標

- 1 自己理解や他者との関わりをとおして、コミュニケーション力の向上を図る。
- 2 社会の一員としての自覚を促し、他者と協働する能力を養う。
- 3 探究的な学びをとおして、主体的に物事を考える習慣や論理的な思考力を養う。
- 4 自分の夢や将来を見据えた進路を設計する力を養い、その実現に向けて弛まず挑戦する強い意志を育てる。

育成したい力と生徒像

自己を客観的に見つめる力（俯瞰力）をもち、新たな価値を見出し、協働して未来を拓くことができる生徒



○3年間の学習の流れ（代表的なスケジュール例）※下線部は共通活動。



○「課題研究」の学習を進める上での留意点

全ての教科学習等において、生徒に「何？」に加えて「なぜ？ どうして？」を意識させる。その上で、「課題研究」の時間においては、生徒の主体性を発揮させることを念頭に、先行研究調査、実験などの手法、自分の意見を根拠をもって伝える方法を学ばせ、学びを他の活動に転移・応用させるような言葉がけをするものとする。これらを実現するため、以下の①～④に留意して学習を進める。

- ① 生徒が「問い」をたてる対象は様々な分野にあり、個人の考え方も多様であることを認識しサポートする。
- ② 生徒が、自分の知りたいことを、自分で具体的に知ることに意味があるため、その手法を学ばせる。
- ③ 生徒が、②で知り得たことを、筋道を立てて、組み合わせる力を育成する。
- ④ 生徒が、あらゆる場面で、①～③で身につけた力を活用できるような仕掛けづくりをする。

○「課題研究」実施の具体

- ・課題研究は、クラスを解体して、比較的近い興味・関心をもった個別の小集団（これを「講座」と呼ぶ。）に再編成して実施する。
- ・同時開講の講座をいくつか集めてクラス規模にした中集団（これを「グループ」と呼ぶ。）を形成する。
- ・グループに属する講座は、中間発表会その他の機会において相互に協力し、教科の枠を越えた協力を行うことを想定する。
- ・講座の担当者数については、グループ内での調整等に基づき、2人以内で各教科が設定する。

○「課題研究」の評価計画

- ・学期ごとに評価を実施する。各段階に応じた3観点の評価規準を踏まえたルーブリックに則り、ABC評価を実施する。
- ・学年の評価は、学期ごとの評価に基づき、3観点を踏まえて文章評価を行うものとする。

<3年次> 「未来への航海図」(1単位)

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
講座選択①						講座選択②			進路実現へ		
<ul style="list-style-type: none"> ・進路希望に応じた講座選択 ・AO、推薦入試への準備等 ・大学研究 						<ul style="list-style-type: none"> ・進路希望に応じた講座選択 ・AO、推薦入試への準備等 ・大学研究 					

<2年次> 「課題研究」実践(2単位)

研究課題の設定	自己研修	文章表現化	研究過程の可視化
<ul style="list-style-type: none"> ・「理解」、「観察」を経て研究対象を知る。 ・先行研究を検索・確認する。 ・根拠をもとに、「仮説」をたてる。 ⇒研究アウトライン作成 ・研究計画書作成をもとに、中間発表①(6月) 	<ul style="list-style-type: none"> ・研究対象を「理解」、「観察」することを継続し、研究アウトラインの見直し(「分解」)などをする。 ・大学研究室訪問 ・フィールドワーク実施 ・実験実施 ・アンケート実施 等 	<ul style="list-style-type: none"> ・調査・実験等から分かっってきたことを文章でまとめる。 ・中間発表②(11月末) ・指摘を受け、ブラッシュアップ。 ・不足している事柄を補う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ポスター作成(1月) ・課題研究発表会(2月上旬) ・振り返り(2月中～下旬) ・進路実現に向けた計画作成

<1年次> 「課題研究へのアプローチ」(LHR等)

「気づきノート」作成	「課題研究へのアプローチ①」	「課題研究へのアプローチ②」
<ul style="list-style-type: none"> ・新聞記事の活用(4月末～) ・「気づき」に関するクラス内交流会(6月) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ブラッシュアップ(9月～10月) ・クラス内交流会(10月下旬) ・振り返り(11月初旬) 	<ul style="list-style-type: none"> ・テーマ探し(11月初旬～) ・テーマ調査(11月末) ・テーマに関するソース探し(12月～)

講演会『新聞記事活用』

講演会『課題研究の意義』岡本尚也氏
講演会『気づきに気づく』平田オリザ氏